

他者軽視傾向との関連から見た遂行接近目標

藤井 勉

論文要旨

本研究の目的は、動機づけの達成目標理論における3つの目標（マスタリー目標、遂行接近目標、遂行回避目標）と他者軽視との関連を検討することであった。遂行接近目標は、他者から良い評価を得ることによって有能感を得ようとする目標であり、学業における成績と正の関連がある（Elliot & Church, 1997）とされる。ゆえに、学業場面においては適応的な目標であると考えられるが、他者との比較を行う目標であることから、他者を見下したり、能力を低く見積もったりするといった他者軽視との正の関連が予想された。本研究では253名の大学生を対象に、達成目標志向性、他者軽視、自尊心、暗黙の知能観、抑うつなど、複数の尺度で構成される質問紙調査を行った。構造方程式モデリングを用いて検討した結果、予測に沿って、遂行接近目標は他者軽視との間に有意な正の関連が示された。本研究の結果から、他者との比較を積極的に求めるような教示や目標設定は望ましいとは言い難い可能性が指摘された。

キーワード【達成目標理論、マスタリー目標、遂行接近目標、遂行回避目標、他者軽視傾向】

問 題

達成目標理論

動機づけにおける近年の主要な理論に「達成目標理論（achievement goal theory; Dweck & Legget, 1988）」がある。この理論では、人を「有能さ（competence）を求める存在」と仮定し、この有能さを求めて人は行動を起こすとされる（上淵, 2004）。達成目標は大別して2種類が仮定されており、自己を比較対象とし、自己研鑽を通して有能感を得ることをめざす「マスタリー目標（学習目標、習得目標、熟達目標などと呼ばれることもある）」と、他者を比較対象とし、他者よりよい成績を得る、または他者よりも低い評価を受けることを避けることで有能感を得る（あるいは維持しようとする）「遂行目標」に分かれる。ゆえに、マスタリー目標を持つ者の評価基準は個人内・絶対的であり、遂行目標を持つ者の評価基準は個人間・相対的である。

マスタリー目標を持つ者にとって、困難の知覚や失敗の経験は、「これまで用いていた方法とは異なる方法での対処が求められている」という情報として機能し、異なる方略を用いた解決が動機づけられる。また、失敗の原因を自身の努力不足に帰属する傾向があり（e. g.,

藤井・上淵, 2010; 奈須, 1990)、ネガティブな感情は比較的生じにくい。

これに対し、遂行目標を持つ者にとっての困難の知覚や失敗の経験は、「自身が低い能力を有するという事実を周囲に露呈してしまった」というネガティブな情報として機能するため、原因を自身の能力不足に帰属しやすく (e.g., 藤井・上淵, 2010; 奈須, 1990)、ネガティブな感情が発生しやすい。そして、以降の課題への動機づけが低下し、課題に回避的になるとされる (達成目標理論のレビューとして、村山, 2003a; 上淵, 2003, 2004 など)。この達成目標を導くとされるのが、「暗黙の知能観 (implicit theories of intelligence)」と呼ばれる、知能に関する個人の素朴理論であると Dweck は考える (藤井, 2012a; Murayama, Elliot, & Friedman, 2012; 上淵, 2003)。Dweck & Leggett (1988) は、知能に対する個人の考え方には増大理論と実体理論の2種類があると述べる。前者は、「知能は自身でコントロールすることが可能で、努力によって変容させられる」とする考え方であり、後者は「知能は生まれつきのものであり、自身の力で変容させることは難しい」という考え方である。増大理論はマスタリー目標を導き、後者は遂行目標を導くとされる。実際に、Dweck は一連の研究を通して、この仮説を実証している。

多目標説の提唱

近年は、達成目標について、前述2つの評価基準 (個人内・絶対的 vs 個人間・相対的) と、接近・回避の2次元を組み合わせた4種類の目標 (e. g., Elliot & McGregor, 2001; Elliot & Thrash, 2002) や、課題に対する接近・回避も含めた6目標 (Elliot, Murayama, & Pekrun, 2011) も提唱されている。特に、遂行目標を2分し、他者よりよい成績をめざす「遂行接近目標」と他者より低い評価を避けることをめざす「遂行回避目標」に分ける3目標説が主張されている (上淵, 2004)。本研究では特に、3目標説における遂行接近目標に焦点を当てた検討を行う。遂行接近目標と遂行回避目標の相関は比較的高く、たとえば藤井 (2012b) では $r(171) = .38$ 、中野 (2011) では $r(32) = .52$ 、村山 (2003b) では $r(1168) = .63$ 、Yamada, Fujii, & Uebuchi (2011) では $r(148) = .48$ という値が得られている。多くの研究で両者が中程度の正の相関を示すことから、遂行目標を2分することについては妥当か否かの議論があるが (村山, 2003b)、遂行接近目標と遂行回避目標の相違を見出した研究として、Elliot & Church (1997) が挙げられる。ここでは、遂行接近目標は成績と正の関連があった一方で、遂行回避目標は成績と負の関連があったことが見出されている。その他にも本邦では Fujii, Yamada, & Uebuchi (2011) が、遂行接近目標は自尊心との相関が有意でない一方で、遂行回避目標が自尊心と有意な負の相関を示すことを確認している。加えて藤井 (2012b) は、遂行接近目標と遂行回避目標とを区別することが妥当であるか否かについて (この議論の詳細は藤井 (2012b) を参照されたい)、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求 (小島・太田・菅原, 2003) との関連から検討を行った。その結果、仮説どおり、賞賛獲得欲求は遂行接近目標と、

拒否回避欲求は遂行回避目標とそれぞれ正の相関がみられたことから、両者を区別することが妥当であると述べている。

仮想的有能感（他者軽視傾向）

ところで、自己の直接的なポジティブ経験とは無関係に、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚として定義される「仮想的有能感（速水・木野・高木，2004）」という概念がある。この概念が提唱されて以降、9年が経過し、その間に多くの知見が報告されてきた（e.g., 小平・青木・松岡・速水，2008；小塩・西野・速水，2009；島，2012）。小塩他（2009）によれば、仮想的有能感は、他者を軽視することを通し、無意識のうちに真実でない仮想的な有能感を得ようとするという潜在的なプロセスを含むという。すなわち、仮想的有能感は本人にとって意識可能なものとは限らず、他者軽視という他者認知傾向の裏側に隠された自己認知傾向とされる。本稿ではこの他者軽視を測定する尺度を用いることから、仮想的有能感を他者軽視と書き換えて論を進める。この尺度を用いた研究は本邦のみならず各国で行われており、台湾や韓国といったアジア圏の他に、北米圏においても日本と同様の一因子構造が確認されている（高井，2012）。

遂行接近目標の位置づけ

学習場面における達成目標志向性とは少し異なるが、Dweck（2006）は、自身が提唱している暗黙の知能観における2つの理論（増大理論 vs 実体理論）を、パーソナリティにも応用が可能であると論じている。この点に関連して、黒田・桜井（2001）は、中学生を対象に、友人関係に関する目標志向性と抑うつ・不安との関連を検討している。その結果、「対人的経験を積むことを通して自分を深めようとする」経験・成長目標（マスタリー目標に相当）は抑うつを抑制し、「自分の性格について悪い評価を避けようとする」評価回避目標（遂行回避目標に相当）は抑うつを促進することを示した。そして、「自分の性格についてよい評価を得ようとする」評価接近目標（遂行接近目標に相当）は、彼らの仮説に反して、抑うつを抑制するという結果を得た。この点について黒田・桜井（2001）は、評価回避目標が高いと、友人関係において「自分の性格の悪さ」に関する評価により敏感になり、傷つきやすく、抑うつが生じやすくなる一方で、評価接近目標が高いと、友人の反応や評価の中でも「自分の性格の良さ」に関する評価により敏感になるため、抑うつが生じにくくなるのではないかと述べている。この結果は、遂行目標のうち、遂行接近目標は精神的不健康の指標である抑うつを抑制するというポジティブな結果をもたらす可能性を示している。また、前述の Elliot & Church（1997）のように、遂行接近目標が成績に対し正の影響を示したことは、学業場面においても適応的な目標である可能性を示す。

問題提起と本研究の目的

それでは、教育場面において学習者に他者との比較を意識させ、互いに競い合わせるように教示することは望ましいのだろうか。遂行接近目標は「他者より高い成績を収めることをめざす」目標であることから、この目標志向性の高さと、他者を見下したり、他者の能力を低く見積もったりする他者軽視との間には正の関連がある可能性がある。もしそうであれば、必ずしも遂行接近目標が望ましい目標であるとは言えないだろう。ただし、単に他者軽視と遂行接近目標との関連のみを検討することのみをもって、遂行接近目標が適応的・不適応的と論じるのは有益とは言い難い。黒田・桜井 (2001) が示すように、遂行接近目標が抑うつを抑制するといった知見を無視することはできないだろう。以上より、本研究では、遂行接近目標と他者軽視、そして抑うつといった各尺度間の関連を調査し、遂行接近目標の性質を検討する。

方 法

調査対象者

大学生 253 名 (男性 118 名、女性 134 名、未記入 1 名。年齢の $M = 20.52$ 、 $SD = 1.92$) を調査対象とした。

尺度構成

達成目標志向性尺度 (田中・藤田 (2003) を一部改変；マスタリー接近目標、遂行接近目標、遂行回避目標、各 5 項目)、他者軽視尺度 11 項目 (速水, 2006)、抑うつ・不安尺度 10 項目 (寺崎・岸本・古賀, 1992)、暗黙の知能観尺度 3 項目 (藤井・上淵, 2010)、自尊心尺度 10 項目 (山本・松井・山成, 1982) を併せて用いた。これらの尺度は 6 件法 (1: 全くあてはまらない—6: 非常によくあてはまる) を用いて回答を求めた。各尺度の項目例を Table 1 に示す。

手続き

講義時間の一部を利用し、調査対象者に質問紙を一齐に配布して回答を求めた。調査の実施にあたり、本調査への参加は任意であることや、調査に参加しないことによる不利益はないことを説明した。また、本調査で得られたデータを公表する際は、統計的処理を行い、個人が特定できない状態にした上で公表することを教示し、同意を得た上で実施した。調査対象者が回答に要した時間は 15 分程度であった。

Table 1 各尺度の項目例

尺度名	項目例
マスタリー目標	授業を終えるとき、より広く深い知識を得ていたいと思う 受講する授業からはできるだけ多くのことを知りたいと思う
遂行接近目標	授業では、他の人よりもよい点を取りたいと思う 授業で他の人よりもよい成績をとろうと思うとやる気が出る
遂行回避目標	授業で勉強する大きな理由は、恥をかかないようにするためだ 他の人よりも悪い点数をとってしまうのではないかと心配だ
他者軽視	自分の周りには気のきかない人が多い 他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる
自尊心	私は、いろいろな良い素質を持っている 私は、物事を人並みには、うまくやれる
暗黙の知能観	新しいことを学ぶことはできても、基本的な知能は変えられないと思う 私の中で、知能はほとんど変えることのできないものだと思う
抑うつ・不安	引け目を感じている ふさぎこんだ

結 果

以下の分析は、統計パッケージである SPSS14.0J および Amos6.0 を用いて処理を行った。

データの整理

各尺度について、逆転項目の処理を行った上で合算し、項目数で除した得点を求めた。いずれの尺度も、得点が高いほど、その尺度名の傾向が強いことを示す。

相関係数および記述統計量

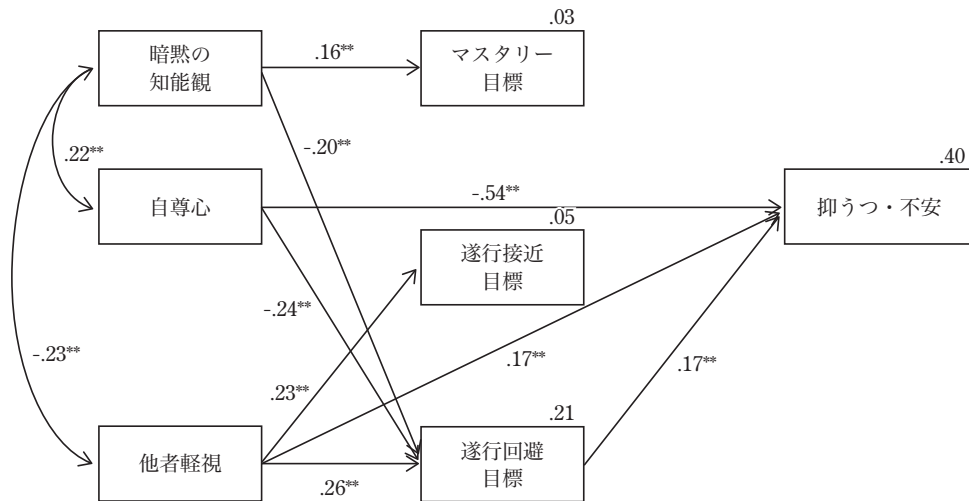
各尺度の相関係数と記述統計量を Table 2 に示す。各尺度の信頼性の推定値として Cronbach の α 係数を算出したところ、その範囲は .74 — .85 であり、十分な値が得られた。暗黙の知能観はマスタリー目標とごく弱い正の相関、遂行接近目標とはごく弱い負の相関を示し、遂行回避目標とは中程度の負の相関を示していた。また、自尊心と弱い正の相関、抑うつ・不安尺度とは中程度の負の相関を示した。他者軽視は遂行接近目標と弱い正の相関、遂行回避目標と中程度の正の相関を示し、抑うつ・不安と弱い正の相関を示していた。マスタリー目標は遂行接近目標と中程度の正の相関を示した。遂行回避目標は自尊心と中程度の負の相関、抑うつ・不安とは中程度の正の相関を示していた。自尊心は、抑うつ・不安尺度とは負の相関を示していた。

Table 2 各尺度の相関係数と記述統計量 (N = 253)

	2	3	4	5	6	7	M	SD	α
1 暗黙の知能観	-.24**	.14*	-.12 [†]	-.34**	.23**	-.30**	3.98	0.98	.84
2 他者軽視	—	-.07	.22**	.32**	-.05	.24**	3.19	0.61	.80
3 マスターリー目標		—	.42**	.07	.12 [†]	-.04	3.80	0.73	.77
4 遂行接近目標			—	.42**	.02	.02	3.70	0.85	.84
5 遂行回避目標				—	-.29**	.36**	3.30	0.80	.74
6 自尊心					—	-.60**	3.48	0.69	.85
7 抑うつ・不安						—	3.23	0.94	.76

[†] $p < .07$, * $p < .05$, ** $p < .01$

Note: 欠損値の関係で、1-6 の尺度は N = 253、7 の尺度のみ N = 250 であった。



[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

Figure 1 本研究で採択したモデル

Note: 観測変数の右上に付した値は重相関係数の平方を、パスの近くに付した値は標準化係数を示す。また、誤差項は記載を略しているが、それぞれの誤差間には相関を仮定しており、マスターリー目標と遂行接近目標の誤差間の $r = .46$ 、マスターリー目標と遂行回避目標の誤差間の $r = .17$ 、遂行接近目標と遂行回避目標の誤差間の $r = .40$ であり、すべて 1% 水準で有意であった。

主題の検討

構造方程式モデリングを用いて、本研究で得られた変数をまとめるモデルを構築し、適合度の検討を行った。モデルの構築にあたっては、相関分析の結果をもとに各変数間の関連を仮定した上で、Amos の修正指標などを参考にしながらモデルを修正した。最終的に採択したモデルを Figure 1 に示す¹⁾。

このモデルの適合度指標は $\chi^2 = 13.635$ 、 $p = .092$ 、 $GFI = .985$ 、 $AGFI = .948$ 、 $RMSEA = .053$ という値が得られ、データの共分散構造をよく説明したと考えられる。まず、暗黙の知能観はマスタリー目標に正の影響を与え、遂行回避目標には負の影響を与えていた。続いて、自尊心は遂行回避目標と抑うつ・不安に対して負の影響を及ぼしていた。他者軽視は遂行接近目標と遂行回避目標の両方に正の影響を与えていた。加えて、他者軽視から抑うつ・不安への直接のパスも有意であり、他者軽視は抑うつ・不安を促進していた。

考 察

主題の検討

まず、本研究の主題を検証する。相関分析の結果や Amos の修正指標などを参考に、本研究で得られた変数に基づくモデルを構築したところ、達成目標の前に他者軽視を置くモデルが採択された。各尺度の測定時点が同一であるため、因果の方向について積極的に言及すべきではないが、少なくとも適合度指標や解釈のしやすさといった観点からは、他者軽視が遂行接近目標や遂行回避目標に影響する可能性が示されたといえよう。このことから、特に本研究で検討を試みた、他者軽視と遂行接近目標の関連は確認されたといえる。また、他者軽視から抑うつ・不安への直接のパスも有意であった。したがって、他者の能力を低く見積もったり、他者を見下したりすることによって特徴づけられる他者軽視は、他者との比較によって有能感を得ることをめざす遂行接近目標や、有能でないことを示されるのを避けようとする遂行回避目標に正の影響を及ぼすと同時に、抑うつ・不安にも正の影響を及ぼすことが示唆される。

また、遂行接近目標は抑うつ・不安に対する影響が有意ではなかった。このことは黒田・桜井 (2001) の知見と一致しないが、黒田・桜井 (2001) の調査対象者は中学 1 年生と 2 年生であり、発達差について確固とした結論を下すことはできないと述べている。本研究の参加者は大学生であり、結果の不一致には発達差の影響も排除しきれない。したがって、この点は今後の検討が必要と見なせる。今後の検討事項として、黒田・桜井 (2001) や本研究で対象とされていなかった中学 3 年生や高校生も含めた横断的な調査が求められる。

本研究の主題に含めなかった点

続いて、主題に含めなかった点について考察する。

本研究では調査対象者の自尊心も併せて測定し、各尺度との検討を行った。その結果、自尊心は抑うつ・不安に対し中程度の負の影響を示した。このことは種々の研究と一致するものである (たとえば、藤井, 印刷中; 伊藤・小玉, 2005; 徳永・堀内, 2012)。また、自尊心は遂行回避目標に対し負の影響が有意であった。自分自身に対する肯定的な感情、自分自

身を価値ある存在として捉える感覚（伊藤，2002）という自尊心の定義に照らせば、他者からの否定的な評価を恐れ、それを避けようとするネガティブな遂行回避目標と自尊心が負の関係を示したことは首肯できるものである。

また、Dweck らが仮定する暗黙の知能観と達成目標との関連については、共分散構造分析の結果から、知能観が増大的であるほどマスタリー目標が高く、知能観が実体的であるほど、遂行回避目標が高いという結果が得られた。この点は Dweck の理論と概ね整合するが、暗黙の知能観から遂行接近目標へのパスは有意ではなかった。実体的知能観を有する者は、「知能は変化させることができない、一種の才能のようなもの」と捉える傾向がある。この考え方が、自身の知能には限界があるという認知を生み出し、能力の低さを知られることを避ける遂行回避目標へとつながった可能性が示唆される。

教育への含意

本研究の結果から、成績に対して正の影響を持ち、抑うつに対して抑制効果がみられるとされてきた遂行接近目標は、他者を見下し、他者の能力を低く見積もることで有能感を得ようとする他者軽視と正の関連が示された。このことは、遂行接近目標がたとえ抑うつを抑制し、学業成績に正の影響を持つとしても、その背景には、他者を見下すことで根拠の薄い有能感を得ようとする、いわば「仮想的な」有能感の存在が示唆される。実際に、他者軽視の高い者はいじめの加害経験や被害経験が多いという報告もある（松本・山本・速水，2009）。ゆえに、特に教育場面においては他者と比較させ、競争させることは望ましくないといえよう。この点は実際に教育現場に身を置く教職員にとっては自明に近いものかも知れないが、実際のデータに裏付けられたといえる。他者と競うことを強調するのではなく、自身の能力を伸ばすことや、過去の自分と比してどの程度成長できているかを意識させるような教示や指導が望ましいと考えられるだろう。

今後の課題

最後に、本研究の課題と今後の展望を述べる。本研究では、他者軽視や自尊心、暗黙の知能観などと達成目標志向性、抑うつ・不安を同じタイミングで測定している。少なくともモデルの適合度という観点からは、他者軽視が達成目標に先行するモデルが支持されたが、本研究では他者軽視は達成目標志向性に先行するものなのか、または続くものであるのか、もしくは相関を仮定すべきなのかは明らかにできない。今後は縦断的な調査を実施し、どちらが先行するのかを明らかにする必要があるだろう。

また、他者軽視を測定する尺度はその内容ゆえに、回答者が防衛的な反応をする可能性がある。実際に、他者軽視を測定する尺度と社会的望ましき反応尺度との間には、有意な相関が検出されている（藤井・上淵・利根川・上淵・山田，2010）。ゆえに、回答者の意識的な

歪曲が困難である潜在的測定法 (e. g., Implicit Association Test; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; IAT) を使用して独立変数となる他者軽視や自尊心、従属変数となる達成目標志向性や抑うつ・不安などを測定することも有益であろう。実際に、他者軽視を測定する IAT は藤井・上淵 (2011) が作成しており、また自尊心を測定する IAT は多くの研究で使用されている (e. g., Fujii, Sawaumi, & Aikawa, 2013; 原島・小口, 2007; 岩田・貝原・権上, 2013; 小塩他, 2009)。加えて、不安を測定する IAT は藤井 (2013) が作成しており、達成目標志向性を測定する IAT は Fujii & Nakano (2012) によって作成されている。これらの測定法も併せて使用し、社会的望ましさによる反応歪曲への対処や、自身でもアクセスが困難な自己概念や態度を測定するといった新たな研究も、理論の発展に寄与すると思われる。達成目標理論は多くの研究から理論的積み上げがなされている理論であるが (藤井, 2012c)、それでもなお研究の余地を残している理論であると言える。今後の研究の発展に期待したい。

引用文献

- Dweck, C. S. (2006) *Mindset: The New Psychology of Success*. New York: Random House.
- Dweck, C. S., & Leggett, E. L. (1988) "A social-cognitive approach to motivation and personality." *Psychological Review*, **95**, 256-273.
- Elliot, A. J., & Church, M. A. (1997) "A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation." *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 218-232.
- Elliot, A. J., & McGregor, H. A. (2001) "A 2 × 2 achievement goal framework." *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 501-519.
- Elliot, A. J., Murayama, K., & Pekrun, R. (2011) A 3 × 2 achievement goal model. *Journal of Educational Psychology*, **103**, 632-648.
- Elliot, A. J., & Thrash, T. M. (2002) "Approach-avoidance motivation in personality: Approach and avoidance temperaments and goals." *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 804-818.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998) Measuring Individual Differences in Implicit Cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- 藤井勉 (印刷中) 「顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連」『心理学研究』 **85**.
- 藤井勉 (2013) 「対人不安 IAT の作成および妥当性・信頼性の検討」『パーソナリティ研究』 **22**, 23-36.
- 藤井勉 (2012a) 「暗黙の知能観」上淵寿 (編) 『キーワード 動機づけ心理学』金子書房 (pp.77-79.)
- 藤井勉 (2012b) 「達成目標志向性と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関係——遂行接近目標、遂行回避目標に注目して——」『人文』 **10**, 93-101.
- 藤井勉 (2012c) 「達成目標理論」上淵寿 (編) 『キーワード 動機づけ心理学』金子書房 (pp.74-77.)
- Fujii, T., & Nakano, Y. (2012) Development of achievement goal orientations IAT and self-efficacy IAT. Poster presented at the 10th Tsukuba International Conference on Memory, Tokyo, Japan.

- Fujii, T., Sawaumi, T., & Aikawa, A. (2013) Test-Retest Reliability and Criterion-Related Validity of the Implicit Association Test for Measuring Shyness. *IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences*, E96-A, 1768-1774.
- 藤井勉・上淵寿 (2011) 「他者軽視傾向を測定する IAT の作成」『東京学芸大学紀要総合教育科学 I』**62**, 287-291.
- 藤井勉・上淵寿 (2010) 「潜在連合テストを用いた暗黙の知能観の査定と信頼性・妥当性の検討」『教育心理学研究』**58**, 263-274.
- 藤井勉・上淵寿・利根川明子・上淵真理江・山田琴乃 (2010) 「他者軽視傾向と社会的望ましさの関連」『日本パーソナリティ心理学会第 19 回大会発表論文集』67.
- Fujii, T., Yamada, K., & Uebuchi, H. (2011) "The relationship between achievement goals and self-esteem." Poster presented at the 6th Self Biennial International Conference, Quebec, Canada, 35.
- 原島雅之・小口孝司 (2007) 「顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果」『実験社会心理学研究』**47**, 69-77.
- 速水敏彦 (2006) 『他人を見下す若者たち』講談社
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004) 「仮想的有能感尺度の構成概念妥当性の検討」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』**51**, 1-8.
- 伊藤忠弘 (2002) 「自尊感情と自己評価」船津衛・安藤清志 (編) 『自我・自己の社会心理学』北樹出版 (pp.96-111).
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005) 「自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討」『教育心理学研究』**53**, 74-85.
- 岩田昇・貝原安耶・権上慎 (2013) 「潜在的自尊心と顕在的自尊心の関連——性別の違いに着目して——」『日本心理学会第 78 回大会発表論文集』**49**.
- 小平英志・青木直子・松岡弥玲・速水敏彦 (2008) 「高校生における仮想的有能感と学業に関するコミュニケーション」『心理学研究』**79**, 257-262.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003) 「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み」『性格心理学研究』**11**, 86-98.
- 黒田祐二・桜井茂男 (2001) 「中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係」『教育心理学研究』**49**, 129-136.
- 松本麻友子・山本将士・速水敏彦 (2009) 「高校生における仮想的有能感といじめとの関連」『教育心理学研究』**57**, 432-441.
- 村山航 (2003a) 「達成目標理論の変遷と展望——「緩い統合」というアプローチから——」『心理学評論』**43**, 564-583.
- 村山航 (2003b) 「遂行目標未分化仮説の検討——遂行目標を接近一回避の枠組みで概念化することは妥当か?——」『ソーシャル・モチベーション研究』**2**, 3-11.
- Murayama, K., Elliot, A. J., & Friedman, R. (2012) Achievement goals and approach-avoidance motivation. In R. M. Ryan (ed.), *The Oxford handbook of human motivation* (pp.191-207). Oxford: Oxford University Press.
- 中野友香子 (2011) 「状況に依存したテスト不安の変動に影響を及ぼす条件の検討」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』**60**, 289-303.
- 奈須正裕 (1990) 「学業達成場面における原因帰属、感情、学習行動の関係」『教育心理学研究』**37**, 84-95.

- 小塩真司・西野拓朗・速水敏彦 (2009) 「潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連」『パーソナリティ研究』 **17**, 250-260.
- 島義弘 (2012) 「アタッチメントの内的作業モデルと仮想的有能感の関連」『パーソナリティ研究』 **21**, 176-182.
- 高井次郎 (2012) 「仮想的有能感形成の背景要因—文化の影響」速水敏彦 (編著) 『仮想的有能感の心理学——他人を見下す若者を検証する——』北大路書房 (pp.139-164.)
- 田中あゆみ・藤田哲也 (2003) 「大学生の達成目標と授業評価, 学業遂行の関連」『日本教育工学雑誌』 **27**, 397-403.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1992) 「多面的感情状態尺度の作成」『心理学研究』 **62**, 350-356.
- 徳永郁子・堀内孝 (2012) 「邦訳版自己概念の明確性尺度の作成および信頼性・妥当性の検討」『パーソナリティ研究』 **20**, 193-203.
- 上淵寿 (2003) 「達成目標理論の展望—その初期理論の実際と理論的系譜—」『心理学評論』 **46**, 392-401.
- 上淵寿 (2004) 「達成目標理論」上淵寿 (編) 『動機づけ研究の最前線』北大路書房 (pp.88-107.)
- Yamada, K., Fujii, T., & Uebuchi, H. (2011) Is performance approach goal truly adaptive?: Relationship between achievement goals and assumed-competence. Poster presented at the 6th Self Biennial International Conference, Quebec, Canada, 38.
- 山本真理子・松井豊・山城由紀子 (1982) 「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』 **30**, 64-68.

注

- 1) モデルの構築にあたっては、達成目標を規定するとされる暗黙の知能観を第一水準に置くことは理論的な根拠があるが、他者軽視や自尊心は達成目標に影響を与えるのか、それとも達成目標から影響を受けるかの予測は難しい。そこで1) 他者軽視および自尊心を第一水準に置くモデル、2) 他者軽視および自尊心を第三水準に置くモデルの両者を構築し、適合度指標を比較したが、いずれの指標も Figure 1 に示す値の方が高かった。また2) のモデルの修正指数を参照すると、「第三水準に置いた他者軽視から、第二水準に置いた遂行接近目標および遂行回避目標へのパスを引くことで適合度指標が改善する」と示された。これらのことから、他者軽視や自尊心を第一水準に置く Figure 1 のモデルが最善と考え、このモデルを採用した。

付記および謝辞

本研究は、日本教育心理学会第53回総会において発表されたデータを再分析したものに基いている。本調査に際し、快くご参加を賜りました大学生の皆様と、本論文に有益なコメントを賜りました査読者の先生に心よりお礼申し上げます。

ENGLISH SUMMARY

The relationship between performance-approach goal and undervaluing others

FUJII Tsutomu

The purpose of the present study is to examine relationships between achievement goal orientations (mastery goal, performance approach goal, and performance avoidance goal) and undervaluing others. Performance-approach goals which focus on outperforming others predict academic accomplishment (Elliot & Church, 1997). Thus, in an academic situation, performance approach goal seems to be the one to adopt. However, because of this goal orientation, the holder pursues competence through comparing with others, so it is expected that performance approach goal has a positive association with undervaluing of others. The participants were a total of 253 graduate students who conducted this study and completed the questionnaire consisting of some rating scales (e.g., achievement goal orientations, undervaluing others, self-esteem, theories of intelligence, and depression). Using structural equation modeling, in line with the authors' prediction, the result reveals that performance approach goal is positively associated with significantly undervaluing others. From the examination presented in this study, it is suggested that instructions and setting goals which compel participants to compare themselves with others are undesirable.

Key Words: achievement goal theory, mastery goal, performance approach goal, performance avoidance goal, undervaluing others